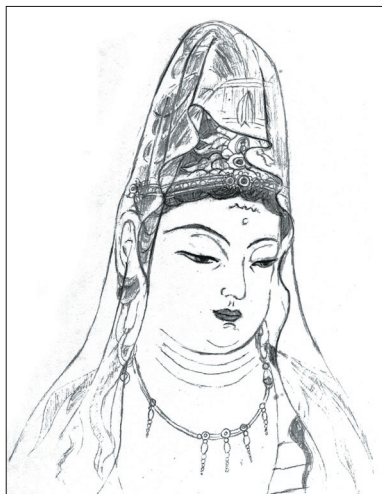


悲しみが消えるということ



次女が20歳過ぎに模写した観音菩薩像。
南無大悲大慈の観世音菩薩。

子どもを亡くした母親がお釈迦様の教えによつてその悲しみを消すことができたという有名な説話がある。

若い母親キサーゴータミーは初めて産んだ子どもをやつと歩けるようになったかわい
い盛り
に亡くす。

気が狂わんばかりの母親はこの子を生き返らせてほしいと叫び廻る。誰もそれに応えることはできない。ある人から、お釈迦様ならいい薬を作つて下さるかも知れないと聞き、彼女はお釈迦様のもとに急ぐ。

「分かつた、薬を作つてあげよう。家を廻つて芥子の種を集めてきなさい。ただし、死人を出した家は駄目だよ」

一軒一軒と訪ねて廻るうちに、彼女はひとつとして死人を出していない家はないことを知り、人は死に、そしてわかれるのだ、死別の悲しみは自分だけのことでないと分かる。時間をかけて徐々に、人は死ぬものであることを知つて、悲しみから解放されるといふ話である。

お釈迦様の教え方はその人にあつたやり方でなされるといふ例としても有名な説話で

ある。

母親キサーゴータミーの悲しみは本当に消えたのだろうか。

もしそうならどうしてそんなことが可能なのだろうかと思う。

釈迦が示したのはこの世のありようである。そのことを知らなかったのでそれを示して教えたという説明である。

人は死ぬべき存在であるという原理を知ることと、死別の悲しみが消えることとの間には、埋めがたいほどの深い溝があるように思えて仕方ない。私には、原理を知って悲しみが消えたというより、それから解放される確かな道を教えられ、そこを進んでいくことが間違いないことであると確信し歩みはじめた、その歩みの中で徐々に悲しみが薄らいでいった、というほうが実感に近い。

原理を日々の生活で確かめながら、ああ、もう考えても仕方がないのだ、と納得するには時間がかかるように思う。

キサーゴータミーはお釈迦様の導きで出家したと説話は結ばれている。

ブツダ・シヤカムニが人としての生を終えたのは旅の途中であった。仏十大弟子の一

人阿難は生涯師のそばにいて教えを聞き、旅を共にしていた。死期がきたことを知ったブッダは阿難に床を用意するように言い、最後の言葉をかける。

「泣くことはない、お前にはすべて話してきた。私が亡くなったあとはその教えに従い、その教えを支えに生きていけばいい」阿難の慟哭は止むことがなかった。

仏涅槃図で横たわる仏のそばで一人泣いているが阿難である。阿難以外の十大弟子が悟りをひらき静かに佇んでいるのに、阿難だけが打ちひしがれたようにして泣いている。阿難が悟りをひらいたのは師亡き後であったと伝えられている。

教える人に依ってはいけない、教え（法）に依れという。それは本当に難しいことだと思う。仏教の原理ははるかかなたで人を待っていて、ここは確かなところだからおいでといっているが、そこがどこで誰が待っているのか、私には分からない。

(二〇〇八年三月十三日)